之強風雨ニ是又立木迄も吹倒し候次第ニ御座候

慶応の米価急騰

西村善雄家文書　慶応二年［一八六六］八月七日

当寅年田作之儀、其以来兎角不順ニ而中稲・晩稲共盆後ニ至り候而茂出穂悪敷、如何御座候哉、日夜心配罷在候処、去ル七日夜中暁ニ至、暴風雨ニ而村中之田作一円吹荒、何共可ㇾ申様無ニ御座ㇾ

善政

昭和初年の土地の古老の話　慶応四年［一八六八］一月

慶応四年正月が伏見鳥羽の戦で、ビクビク肝を冷やさねばならなんだ。それに引き続いてこの大水だ。（中略）ちょうど四月上旬から大雨が降り続いて、淀川木津川が大いに増水し、大池はおよそ一丈八尺余りの増水だ。とうとう五月十二日丑の刻（午前二時）宇治橋の下流、いまの桜井の池の堤が二百間余りも切れ、さか落しに押寄せてきた。流水は当時宇治橋の本にあった橋姫神社を押し流し、槇島村を浸してエンバ堤を巨椋大橋の上手で切り、小倉の北では橋本町の定右衛門・三四郎・与吉・卯右衛門・万吉・熊右衛門・幸右衛門・覚右衛門・茂平治・文七都合十軒が流され、三四郎のお仲婆さんはクズ屋の家といっしょに大池へ流され、大声あげていたのを、助け船を出して破風より助け出した。

戊辰の淀

都鄙新聞第四号　慶応四年［一八六八］

淀城中一円ノ水中ト成リ淀橋流レ落チ所々堤切レモ有ㇾ之

災害のなかから

京都日出新聞　昭和九年［一九三四］九月

暁過ぎから近畿地方を襲うた空の大魔王、猛台風は狂ひに狂ひ暴れに暴れ、募る狂暴さは午前八時半に至つて、風速実に二十八メートル、京都付近を突いて当地未曽有の烈風となり、看板を吹き、電柱を倒し、屋根を剥ぎ、家を飛ばし、倒壊家屋は無数、死者、負傷者続出、殊に淳和、西陣、八幡、朱雀第七等々小学校の崩壊は、授業開始の間際のこととて幼き者の死亡は百に垂んとして、悲惨眼も当てられず。

土砂災害

京外への道

日本紀略　天暦三年［九四九］五月二十二日

近くは曾て粟田山路俄かに以て頽破し、已に損害をなす、車馬の往還甚だ煩い多し、官使を差して実検を加うべきの由、宣旨を山城国に給う

地震災害

橋梁の造営と河川の修理

山槐記　元暦二年［一一八五］七月九日

午の剋、地震う、五十年已来未だ覚悟せず、（中略）後に聞く、宇治橋皆以て顛倒す、時に之を渡る人十余人橋に乗り水に入る、其の中一人溺死すと云々

市街の周辺地域への拡大

花園天皇宸記　正和六年［一三一七］一月五日

後に聞く、地震の間、人家或は顛倒すと云々、白河辺り五人死者ありと云々、元暦以来此の如き地震未だあらざる歟、近代未曾有と云々、正応の関東大地震は数日と云云、其の時尚此に如かずと云々

慶長の大震災

義演准后日記　慶長元年［一五九六］閏七月十三日

伏見の事、御城・御門殿以下大破、或は顛倒、大殿守（天守）悉く崩れて倒れ了ぬ、男女御番衆多死す、いまだその数を知らず、其外諸大名の屋形、或は顛倒、或は相残るといえども形ばかりなり、其外在家のていらく前代未聞、大山も崩れ大路も破裂す、ただごとに非ず

慶長の大震災

増補家忠日記　慶長元年［一五九六］

上臈女房七十三人、仲井（居）下女五百余人横死す

慶長の大震災

言経卿記　慶長元年［一五九六］閏七月十三日

一、寺内ニハ門跡御堂（本願寺）、興門御堂（興正寺）等顛倒了、両所ニテ人二、三人死去了、其外寺内家悉大略崩了、死人三百人ニ相及了、全キ家一間（軒）モ無ㇾ之

一、上京ハ少損了、下京ハ四条町事外相損了、以上二百八十余人死也、東之寺其瓦フキハ崩了
一、禁中ハ少ニ相損也云々

文政の大地震
本朝地震記浮世の有様　文政十三年［一八三〇］七月二日
七月二日、朝より一天晴にあらずくもるにあらず、俗にあぶら照といへるけしきにて、蒸炎昨日に増り、凌ぎ難かりしが、漸くに七つ頃（午後四時）となれば、やがて暑気も少しはさるべき也とおもひ居たる折から、雷声のごとき虺々（くわい）とひびくと等しく、夥しく地震出ず、是はいかにと、衆人おどろく間もなく、引続たる大地震、見る見る家蔵の震動する事、宛も浪のうちまたがるがごとく、（中略）宝暦のむかしはいざ知らず、八十年来珍しき事なりけり、扨京都の人家或は倒、また柱ゆがみ、天井おち、或は竈の壊たる尤も多く、（中略）凡京中の土蔵に一ヶ所として満足成はなく（中略）京都の人家大小とも破損せざるなければ、急に其修理をなさんとすれども、大工・左官はもとより手伝人歩（夫）にいたる迄、迚も家々に充る事かたければ、やうゐに出来らず、適々来るといへ共、一日来れば二日来らず、二日かかれば五日休むがゆえ、修理も全からず

地震の季節
兎園小説拾遺　文政十三年［一八三〇］
別して上京、西山辺、嵯峨桂川つづき、伏見辺荒れ強く前代未聞の事

弘化・嘉永の世情
安達清風日記　嘉永七年［一八五四］閏七月十四日
京師は量軽き方に候乍、土蔵石灯籠類の全きものは無之候

弘化・嘉永の世情
安達清風日記、若山要助日記　嘉永七年［一八五四］一一月
此度之地震殊に甚敷、京師も余程之地震にて、主上近衛公之邸に御遷坐、大坂も高潮

火災

京内の構成と町の発達
日本後紀　大同三年［八〇八］十月八日
左衛士坊に火を失し、百八十家を焼く、物を賜うこと差あり

京内の構成と町の発達
続日本後紀　承和六年［八三九］閏一月十五日
織部司織手町災す、百姓の廬舎数烟を焼く

京内の構成と町の発達
続日本後紀　承和六年［八三九］四月十五日
左馬寮国飼町に火つけり、其の燼、中院細殿の上に飛落す、撲滅するなり

京内の構成と町の発達
続日本後紀　承和八年［八四一］七月六日
左兵衛府駕輿丁町の西北角、火を失し、百姓の廬舎卅余烟を焼損す、行人を駆せ追い撲滅せしむるなり

京内の構成と町の発達
続日本後紀　承和九年［八四二］七月十九日
左京（木脱カ）工町に災す、廬舎廿烟を燔く

京内の構成と町の発達
続日本後紀　承和十四年［八四七］八月二十一日
西京衛士町災す、百姓廬舎卅余烟を焼く

京内の構成と町の発達
続日本後紀　嘉祥元年［八四八］六月二十八日
右衛門南町の民家に火を失し、延きて数十烟を焼く

京内の構成と町の発達
文徳天皇実録　天安元年［八五七］八月二十七日
右近衛舎人町に火つけり

京内の構成と町の発達
日本三大実録　元慶元年［八七七］十一月二十一日
左衛士居坊に火つけり、延きて七家を焼く

京内の構成と町の発達
日本三大実録　元慶三年［八七九］八月三十日